



大岡
 談
 村
 井
 長
 卷
 調
 合
 机

元岡 徹太 編 註
 大尾 五 六編

873
 20



873
20

873
20

大岡政談 村井長菴調合札卷之廿

東京 元岡維則編次

上 三十一

第六回

悪賊滅て善人栄富に進む

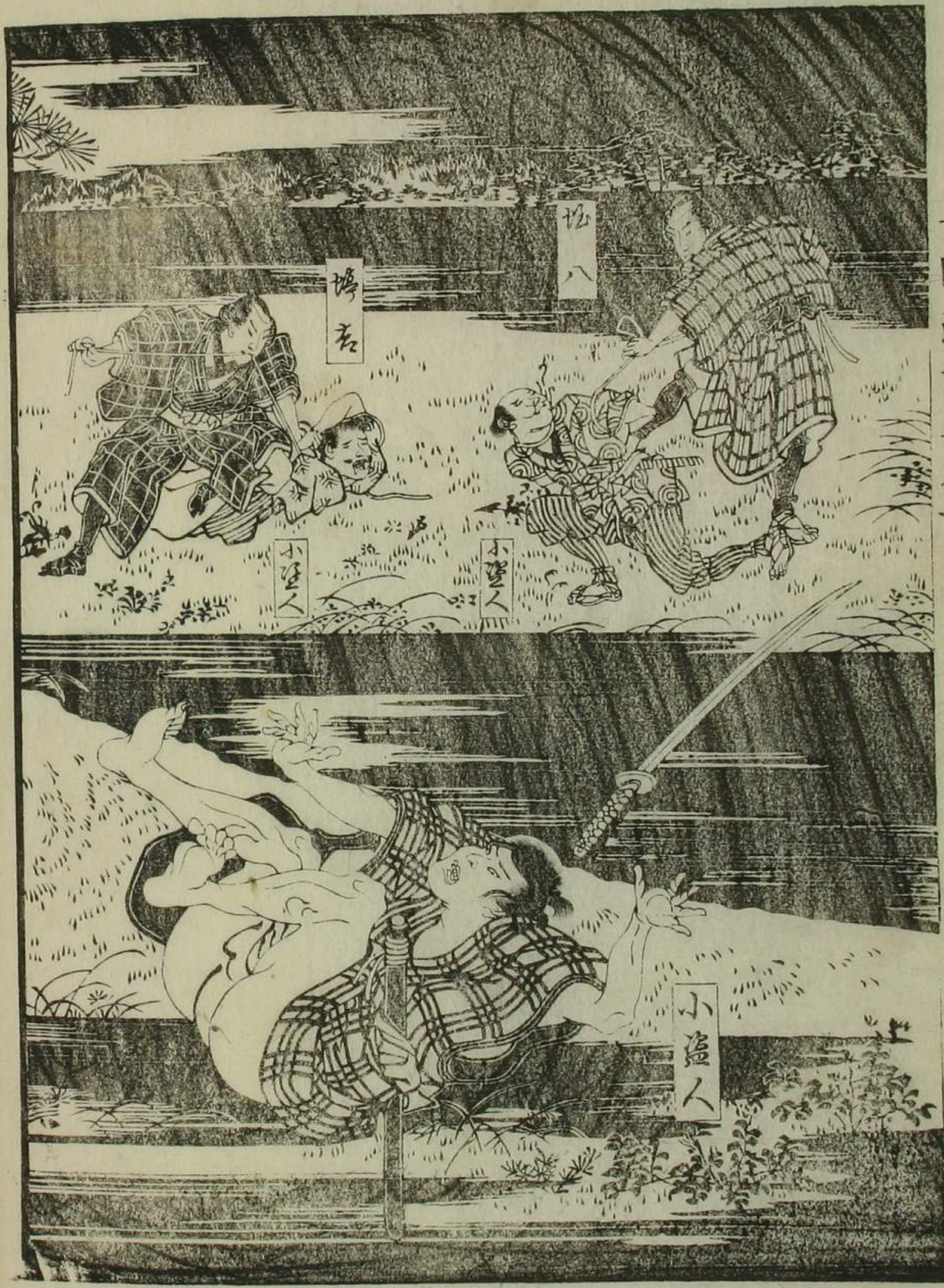
得吉ハ煙ハ計

業と云ふ可ごとし。我若に心を合せ是を勤んと云に。

逃せ又めんを望めり。彼若と合て婦女を連り旗人ハ賊と欺くに尤も宜
う。又多年禁剣の縁。幸ひ其任に當る事多し。また其のこゝろ。又も
得吉は煙を將く。計り事柄をまゐり。八幡宮の煙谷の驛に宿り。求め刀劍を
に包む。新物のゆに敷。思ひくは脊。肩のあはく。山野の道。何の心算りも
お垂びて通り居たり。二日目の夜に。まよふ。煙谷の宿。宿屋に。城も元々
三人の旗人。出逢ふ。十太汁を以て。過し。之が。宿に。宿屋に。旗人。白井宗

大岡政談卷之廿

辰保堂藏版



三勇針を
 盗りて
 成す

かく二文竟に五千金と才元一も徳永に渡り。今令の是に成り久しと申す。徳永が白く夜同備の金面々に苦勞と掛る心と涙を去りぬ。父貞高が迷物たる名刀。他人の有りてはせん。本主下郎重忠を助け免す。角も品取戻し。魚の金。我々永白に掛け。辨海主一とて更納めて。我令とぞ。此國綱と更原一けり。實に朽木か。父守九郎。我娘は。の災我白井乃。休るに救はせ。一とす。是はの恩を報謝せん。培吉に高儀と。培吉が曰く。吾其今尚窮し居たり。彼を救つて其報ひに。尚ほ二家親族の爲か。我に任せ。一とす。吾平に高儀也。通ひ乃。雇人の抱き。徳方へ買物と賣捌する。商と扱ふ。む。吾平は。吾其。我南庄の益。盗突と成。はび。路と。あ。て。使ひ。是。は。

夫婦 徳高の塚を脱し。後に外戚体面をも我々に引外し。生涯と養ひ。遂一と。又。培吉。六。劍。抄。の。師。諸。岡。十。内。死。せ。し。後。海。目。の。絶。る。を。懸。み。吾。を。秘。に。高。儀。と。懸。も。同。く。事。し。我。元。一。の。半。心。を。掛。居。り。一。言。云。ぶ。ま。の。有。り。師。の。翁。和。を。誓。と。成。し。進。世。が。成。長。し。後。妻。ハ。世。人。と。思。ふ。我。に。示。さ。し。一。の。有。り。を。吾。平。の。孫。と。傳。へ。ば。吾。平。の。心。も。時。の。物。順。か。ん。其。志。一。有。り。進。世。も。流。ん。と。云。ぬ。培。吉。是。を。留。て。心。決。し。我。が。武。藝。未。熟。し。誰。も。師。已。に。は。心。内。と。云。ふ。跡。を。継。ぐ。人。無。り。輕。八。尾。に。放。り。徳。永。に。妻。細。と。告。げ。進。世。を。先。ん。で。依。代。と。す。郎。夫婦。天。に。可。く。し。進。世。に。傳。吉。と。夫婦。と。成。り。孝。受。が。家。を。立。ん。由。と。鏡。物。進。世。傳。吉。と。云。う。中。軍。り。心。服。し。言。葉。に。隨。ひ。就。て。謀。

好むらんを乞ぬ徳永快く許す。好く音を撥んで婚嫁を成さし
 めぬ。是より一々轉吉、備岡十々進と改名し、益武也と名を賜ふ。後
 劍の師と成つて門戸を張り、門人教多を以て夫婦豊に世を送りぬ。
 秘ハハ又まゝ法儀に仕官あり。まゝ方より就てお木を常んを爲し、常
 一。字五郎又二名が爲に厚き字を授けたり。時、お木が常んを爲し、常
 村の抽今尚家に在り。相模屋と名を巨商の心に風雅有て守傳を
 甥りに懇望せり。久八の周旋を扱ひ、言ひ價を定めて、相模屋より求
 めしむ。字五郎お木火に悦び、お模屋のまも望遠く、又決し、是
 り、無事五郎が家に交加し、ぬ相模屋竟に娘を久八に妻に。永く
 五郎と縁者の因と後下。まゝお木つゝ、平が援助を受け、母子安堵く

世送りぬ。道之助とて家を興し、めん望あり。中々、平の常
 等にも老しと告げ、又五郎に毛を商儀せ、徳永も志しと愛で、母の心算
 以有、我道之助と名を預り、文武の両道と授け、第一は身の手を成、世
 めん、と竟に家に付し、密に教授を始めたり。親友なる幸山、お木印
 射術の達人あり。此の由とせ、自ら及、射に熟ん、志しと述、徳永も
 かりとて又學ぶ。物にそなたに愧、して是も、衆人に詔たり。徳永天性
 の備りたるを察し、お木印に流く傳授し、随従して、お木と學ぶ。一
 道、お木を技に進むる最早く、お木印お木を考へ、お木を承、お木
 等に道の竹、成、お木とせ、お木が末の妹、お木とせ、お木十、お木
 ありと、お木に、お木互、お木成、お木後、お木せ、お木成、お木成、お木

合之圖



曾五八

沖見

丹助

小夜衣

吉平

折木

新吉

淳吉

世

丁山

遠山萬四郎

大岡政談卷之七

八
張栄堂藏版

卷中善人集



長助

新六

千之助

五年郎

久八

岡路

友助

打子

忠之助

木曾院公貞

乃之助

徳永左郎

於三

大岡政談卷之七

張栄堂藏版

予以為古人の事歴と述んとするに
 真傳の書有る者八幡に傳る乃
 諸説も折衷して取らんバそと記し
 盡を能く則ち其真あらんと譽
 虚なきんを除き取捨せざる情の長
 きを述ぶ後違有るべし人号と怒
 せよ

○始めに藤掛氏と調りき北の
 府尹予が傳ある況はハ姓名分
 明ありて只尹云後掛が途に申死



為しと遺憾く思ひありしに然らば後掛存命ありは伊の尹の清く
 捜索しそ長崎が恩事と登壇せしむる奉はるん此是後掛が
 為命かり村井実録にハ中山信玄と有り決断せしむ長崎を
 對波中後掛守死を記載するも實亦同トハ條哲々村井実録に
 随つゝ其の實を記す△藤掛の苗字実録にハ後崎と有り或曰く
 後崎ハ非之後掛と予が傳ある又後掛あり傳々参考し此
 書ハ後掛を以て記す△長巻刑に交せしむ後大岡
 公十太衛門が身依太郎作と云考と召喚せし山を引渡しハ條村
 井実録に見ゆ然も此節ハ十太衛門如何なる縁續と云るを
 記せざる應其が詳らありし思ふ予が傳中ハ有る丹助ハ之ト

明治十五年十一月十四日御届
同 十六年一月廿五日出版

浅草區浅草由原町二丁目五番地

編輯人 東京府民 元岡徹太郎

浅草區浅草三好町七番地

出版人 同

大川錠吉

大坂書肆

大坂本町四丁目

岡島真七

芝三島町

山中市兵衛

浅草廣小路

吉田久兵衛

横山町四丁目

辻岡文助

日本橋
通三丁目

小林鉄次郎

弥左門町

武田傳右衛門

浅草新福町
五番地

高梨彌三郎

同三好町
七番地

大川錠吉

東 京 書 肆

